

令和5年度 淀川における舟運を活かした賑わいづくり実証事業（実施概要版）

事業目的

淀川は古くから京都と大阪を結ぶ水上交通路として活用され、流域に多くの文化が生まれた。京都・大阪は関西においての二大観光拠点であり、流域と連携した活用によって継続的な来訪や消費額拡大につながる事が可能となる。また、大阪・関西万博までに淀川大堰閘門が整備され、京都から大阪湾までの運航が可能となることが予定されている。

令和4年度事業では、各沿川地域の特性に応じた取組の必要性及び、舟運のみの取組では賑わい創出や持続可能性が限定的であることなどが示された。それらを踏まえ、令和5年度事業においては、大阪・関西万博に向けて、舟運と既存の観光コンテンツを組み合わせた地域の賑わい創出につながるようなモデルコースの構築及び検証を行い、あわせて、今後の淀川の水域活用にに向けた安全面での検討も実施する。

事業概要

- （1）淀川・舟運と地域をつなぐテーマ・ストーリーの検討**
上流、中流、下流のエリアごとに「淀川・舟運」と各地域コンテンツを関連づけるテーマやストーリーを検討した。
- （2）インバウンド向け舟運コンテンツ造成の方向性検討**
沿川地域の賑わいづくりに有効利用できる舟運コンテンツ造成の方向性について検討した。
- （3）舟運を活用したモデルコース構築・ツアー化に向けた検証**
(1)(2)を組み合わせたモデルコースを構築し、ターゲット設定も含めて、実際のツアー化に向けた検証を実施。
- （4）淀川の水域を安全利用するための検討**
淀川の船舶等利用輻輳、多様な活用に備えた水域利用エリア区分、船着場利用等も含めた安全利用手法検討。

実証運航の実施

エリア	タイトル（テーマ）	ターゲット/モニター	初稿商品化の方向性	行程と体験したコンテンツ	実証結果	今後の方向性（課題等）
上流域	石清水八幡宮での特別体験と淀川の舟運体験 	○ターゲット：英語圏、40代以上、カップル・友人旅行。 訪日リピーター、京都・大阪に滞在し、日本の文化歴史に関して、新しい体験をしたい層。 ○モニター：①外国人モニター3名 （英語圏40代以上、関西在住） ②通訳案内士3名 （英語圏対応で、パーソナルガイドツアー実施者）	○パーソナルガイドツアー （宿泊ホテル発着のガイド付き、個人・グループツアー） ○手配型旅行 （団体・グループの観光プログラム）	○コース：新大阪駅～(移動車)～ 石清水八幡宮～(移動車)～ 松花堂庭園～(移動車)～さくらであい館～(移動車)～枚方船着場 ○コンテンツ：石清水八幡宮（特別参拝体験、本殿等国宝文化財）、松花堂庭園（「詫び寂び」の日本庭園）、松花堂弁当（日本食文化体験）、さくらであい館、淀川クルーズ（淀川の自然・眺望、淀川舟運の歴史、クルーズ体験）、鍵屋資料館（淀川舟運の歴史）、京街道・枚方宿（街あるき）	◇石清水八幡宮（特別参拝、神社・文化財解説）、松花堂庭園（吉兆含む）、鍵屋資料館それぞれのプログラムへの評価は高いので、一層外国人が体験を楽しめるような、受入環境整備（特に、英語対応のサインやツール）や価値の理解促進する施策（ストーリーづくり、プレゼンテーション手法等）実施が必要。 ◇上流部のクルーズでは、今回実施できなかった背割堤→枚方の引き続きの検討に加えて、クルーズのコンセプトやテーマ設定を十分検討したプログラムの開発が望まれる。	◆お茶の京都DMO等と連携し、地域が実施するプログラムを活用した舟運活用策検討 ◆淀川上流部での舟運活用コンテンツの開発及び歴史解説手法の検討
中流域	京街道・枚方宿の歴史と舟運の歴史体験クルーズ 	○ターゲット：英語圏、20代以上、カップル・友人・家族旅行。 訪日リピーター、京都・大阪に滞在、外国人の行っていない地域を訪ねて、地域とのふれあいや自然を楽しみたい層。 ○モニター：①外国人モニター2名 （英語圏の20代以上、関西在住） ②通訳案内士3名 （英語圏対応で、パーソナルガイドツアーを実施者）	○パーソナルガイドツアー （宿泊ホテル発着のガイド付き、個人・グループツアー） ○手配型旅行 （団体やグループの観光プログラム）	○コース：枚方公園駅（京街道・枚方宿）～ 枚方船着場～ 八軒家浜船着場 ○コンテンツ：京街道・枚方宿（街あるき）、鍵屋資料館見学、くらわんか御膳賞味、淀川クルーズ（舟運の歴史、呈茶（お茶・和菓子賞味）、夕景・毛馬閘門の体験）、沿川イベント連携（ロハスパーク枚方、ひらかた菊フェスティバス）	◇鍵屋+京街道の枚方宿街歩きは高評価であった。クルーズ内の各コンテンツも一定の評価を得た。今後、天候や気象条件に対応した、船上と船内コンテンツ等の整理や工夫、磨き上げが必要。また、鍵屋資料館を中心としたエリアの外国語対応を促進が必要。 ◇淀川舟運の歴史を象徴する枚方宿体験と歴史や文化を感じさせるクルーズプログラムの組合せ、定番化の方向性の検討が必要。	◆枚方市・観光協会、京阪HDと連携し、枚方舟運の歴史体験拠点「鍵屋資料館」と周辺の英語対応とプレゼンテーション力強化、京街道の外国人向けコンテンツとしての磨き上げ、インバウンド推進体制の確立 ◆クルーズ船内での定番（売れ筋）コンテンツの確立
下流域	十三のアート（淀壁）体験と梅田夜景クルーズ 	○ターゲット：市場は限定せず、20代以上、カップル・友人旅行。 十三・梅田エリアや大阪に宿泊する訪日外国人で、新しい夜の楽しみ方を探している層。 ○モニター：①外国人モニター4名 （アジア、欧米豪の20代以上、関西在住）、 ②インバウンド事業者3名 （十三・梅田地区ホテル関係者、旅行会社等）	○十三～梅田エリアのホテルと連携した旅行商品（ホテル宿泊者向け） ○MICEのユニークベニュー （梅田エリアでのMICEのアフターコンベンションメニュー）	○コース：ホテルプラザオーサカ～(移動車)～ 十三駅周辺（淀壁鑑賞・街あるき）～(移動車)～新北野船着場～(移動車)～ホテルプラザオーサカ ○コンテンツ：淀壁鑑賞（アーティストによる解説付き・9カ所）、着物着付け体験（日本文化体験）、街あるき（着物で散策）、梅田の夕景・夜景クルーズ（エンタメショー、カラオケ、アルコール+日本食）	◇「淀壁」を活用した街歩き体験は、十三の新しい観光コンテンツとして人気が出る可能性がある。今後は、プログラムづくりが地域側で進展する活動の支援が望まれる。 ◇梅田の夜景クルーズは、今年度も高評価。引き続き、十三船着場開業を視野に入れた、プログラム開発や磨き上げが望まれる。また、夜景+αの魅力開発、夜間以外の時間を活用したクルーズ企画等の検討も必要。 ◇クルーズと十三エリア街歩きの組合せについては、「エリアの魅力を引き出す」「多様なニーズに答えられる」街歩きプログラムの開発とその運営体制づくりが必要。	◆エリア内宿泊施設、地域事業者、十三河川敷エリア指定管理者、自治体等と連携した、地域プログラムづくり推進主体の創出 ◆DMO梅田、梅田周辺ホテル等と連携した、夜景クルーズの販売やMICEでのユニークベニュー化の検討 ◆クルーズの付加価値を高める演出手法等について検討

淀川の水域を安全利用するための検討

今後想定される航行船舶の輻輳や多様な淀川の活用方法に備えた水域の利用エリア区分や船着場利用等も含めた安全利用するための手法を、専門家（大阪水上安全協会及び舟運事業者）へのヒアリングを行い、検討を実施。

【主な意見】◆輻輳を想定した場合、何らかのルールづくりが必要であることは専門家全員が発言。◆ただし、淀川の場合は、画一的なルールづくりが難しいという認識も一致。◆「レジャーの種類ごとに推奨区域を設定」し、その区域ごとのルール・ガイドラインを策定することが適切な進め方であること。◆大阪水上安全協会として、区域設定やルール決め、講習、加盟船舶への周知などへの協力は可能。◆レジャー利用者にも「船種による航行ルートの違い」「淀川の水深に関する状況」「上流部での河川環境の急激な変化」の周知、「位置情報の共有」「海図等の提供」が安全対策につながる。

◆何らかのルール・ガイドラインづくりの必要性 ◆淀川の状態に合わせた注意事項の啓発の必要性

◆レジャーの種類ごとの推奨区域設定

◆レジャー利用者への淀川の特性情報や利用注意事項の啓発

◆水安協の協力による推進
◆航行船舶への周知

令和5年度 淀川における舟運を活かした賑わいづくり実証事業（実施概要_補足資料）

事業目的

淀川は古くから京都と大阪を結ぶ水上交通路として活用され、流域に多くの文化が生まれた。京都・大阪は関西においての二大観光拠点であり、流域と連携した活用によって継続的な来訪や消費額拡大につながる事が可能となる。また、大阪・関西万博までに淀川大堰閘門が整備され、京都から大阪湾までの運航が可能となる事が予定されている。

令和4年度事業では、各沿川地域の特性に応じた取組の必要性及び、舟運のみの取組では賑わい創出や持続可能性が限定的であることなどが示された。それらを踏まえ、令和5年度事業においては、大阪・関西万博に向けて、舟運と既存の観光コンテンツを組み合わせた地域の賑わい創出につながるようなモデルコースの構築及び検証を行い、あわせて、今後の淀川の水域活用に向けた安全面での検討も実施する。

事業概要

(1) 淀川・舟運と地域をつなぐテーマ・ストーリーの検討

上流、中流、下流のエリアごとに「淀川・舟運」と各地域コンテンツを関連づけるテーマやストーリーを検討した。

(2) インバウンド向け舟運コンテンツ造成の方向性検討

沿川地域の賑わいづくりに有効利用できる舟運コンテンツ造成の方向性について検討した。

(3) 舟運を活用したモデルコース構築・ツアー化に向けた検証

(1) (2) を組み合わせたモデルコースを構築し、ターゲット設定も含めて、実際のツアー化に向けた検証を実施。

(4) 淀川の水域を安全利用するための検討

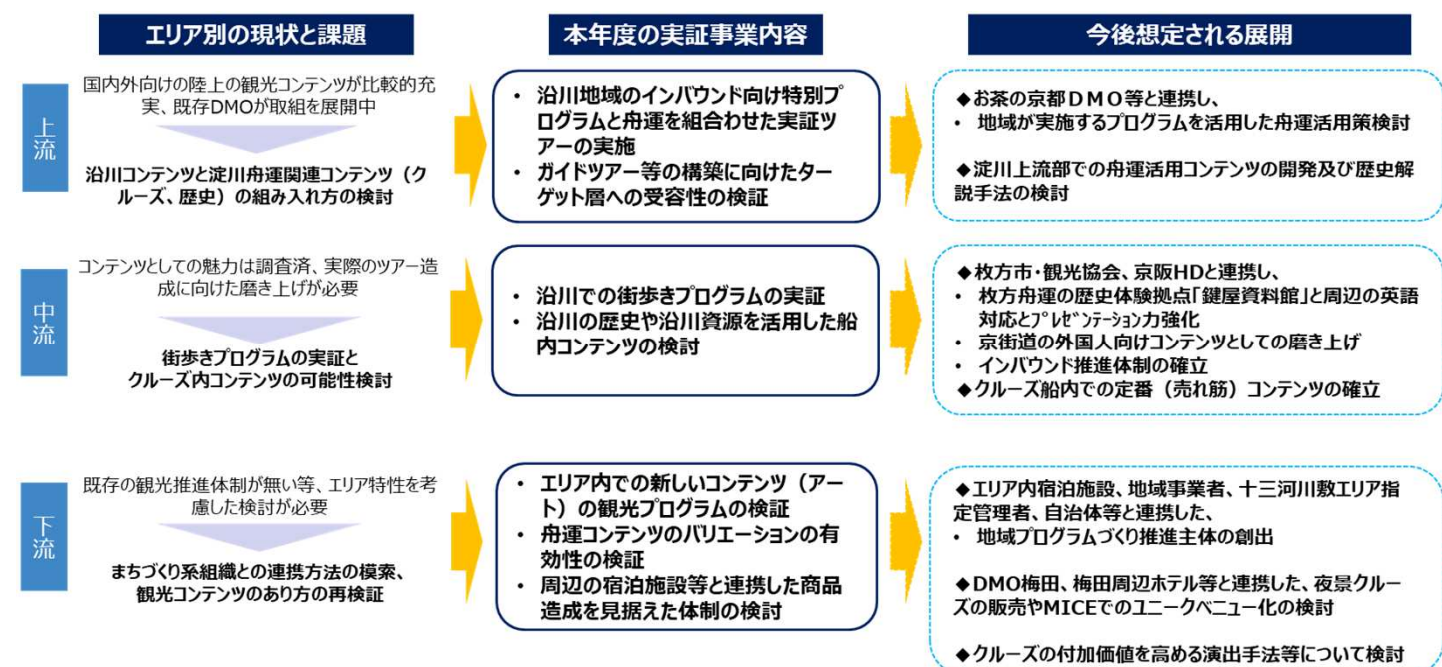
淀川の船舶等利用輻輳、多様な活用に備えた水域利用エリア区分、船着場利用等も含めた安全利用手法検討。

事業実施体制

- ◆上記(1)～(3)の検討は、専門家3名に舟運事業者を加えたメンバーにより、現地調査(上中下流各1回)、検討会(2回)、実証運航(3回)により実施した。
- ◆上記(4)に関しては、大阪水上安全協会、舟運事業者へのヒアリングにより方向性をまとめた。

実証運航の概要

上流、中流、下流のエリア別に分けて各1回の実証運航を実施。各実証運航は、沿川地域体験プログラムと淀川を使ったクルーズの組合せで、各ターゲット層に合わせたモニター参加による実施。



【主な意見】

◆輻輳を想定した場合、何らかのルールづくりが必要であることは専門家全員が発言。◆ただし、淀川の場合は、画一的なルールづくりが難しいという認識も一致。◆「レジャーの種類ごとに推奨区域を設定」し、その区域ごとのルール・ガイドラインを策定することが適切な進め方であること。◆大阪水上安全協会として、区域設定やルール決め、講習、加盟船舶への周知などへの協力は可能。◆レジャー利用者にも「船種による航行ルートの違い」「淀川の水深に関する状況」「上流部での河川環境の急激な変化」の周知、「位置情報の共有」「海図等の提供」が安全対策につながる。



総括

淀川沿川で、淀川舟運を活用し、「観光」による賑わいづくりを創出していくためには、沿川地域を対象としたツーリズムマネジメントを進めていく必要がある。

◆沿川全体、水系全体を通した活動では、淀川全体を見渡す「観光」視点を確保した上で「淀川水系のブランディング」を考えることが必要。

◆広域連携団体等を連携して、「沿川(観光)情報の編集」や「人、組織を集結し連携、調整」をはかることも重要。

◆各流域では、エリア毎に地域の「人、組織を集結し連携、調整」を推進することに加えて、沿線地域ごとにその特徴を活かした「旅行商品づくり」に必要な人や企業等を集めることにより、具体的な観光プログラムづくりを進めることが重要。

◆すべての活動の基盤となる「水上交通の安全・安心」の確保では、水上安全協会と連携し、河川のレジャー利用者も含めた「安全・安心に関する啓発」を進めることが必要。

